【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

(領域ごと)

①言葉の特徴や使い方に関する事項	大変良好な結果であった
②情報の扱い方に関する事項	良好な結果であった
③我が国の言語文化に関する事項	良好な結果であった
④話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった
⑤書くこと	大変良好な結果であった
⑥読むこと	大変良好な結果であった

(問題形式)

①選択式	良好な結果であった
②短答式	大変良好な結果であった
③記述式	良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

最も正答率の高かった問題は4―「歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す」。次に正答率が高かった問題は2―「『落胆する』の意味として適切なものを選択する」であった。
最も正答率の低かった問題は「漢字を書く」「現代語で書かれた『竹取物語』のどこがどのよう
に工夫されているかについて、古典と比較して書く」であった。

分析

- ・正答率が全ての項目において全国平均を上回る結果であった。選択式の問題の正答率が高いが、自分の考えを書く記述式の問題の無解答率が高かった。
- ・選択問題においては無解答がない問題が多くあり、あきらめずに取り組む姿勢が見られる。
- ・今後の課題としては、自分の考えをまとめて書けるようになることである。普段の授業から自分の考えを言語化し、自分の言葉でまとめる力を育むことを重点的に行うことが必要だと考えられる。

(領域ごと)

① 数と式	大変良好な結果であった
② 図形	大変良好な結果であった
③ 関数	大変良好な結果であった
④ データの活用	大変良好な結果であった

(問題形式)

① 選択式	大変良好な結果であった
② 短答式	大変良好な結果であった
③ 記述式	大変良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった。

(その他)

もっとも正答率が高かった設問は、6(1)の「はじめの数が11のとき、はじめの数にかける数が2、たす数が3のときのときの計算結果を求める」であった。一方最も正答率が低かった設問は、3の「空間における平面が1つに決まる場合について、正しい記述を選ぶ」問題であった。

分析

- ・ 無解答率は平成22年を境に年々減少傾向にあったが、平成31年を境に令和3年～5年にかけて全国と比べると良い結果といえるが、増加傾向が続いている。
- ・ 6(2)のような整数の性質を理解し説明する問題において、全国平均に比べて正答率が高く、無解答率も低い結果となっている。文字式の適切な変形やその意味を読み取る力が高いと考えられる。
- ・ 7(2)のように箱ひげ図を正しく読み取り複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉える問題では、全国平均同様正答率が低く、無解答率が高い結果となっている。そのため、ヒストグラムや箱ひげ図のようなデータの分析を行う資料の意味を理解するとともに数学的表現を用いて説明する機会を多く設定する必要がある。

○●英語●○

(領域ごと)

①聞くこと	大変良好な結果であった。
②読むこと	大変良好な結果であった。
③書くこと	大変良好な結果であった。

(問題形式)

①選択式	大変良好な結果であった。
②短答式	大変良好な結果であった。
③記述式	大変良好な結果であった。

(無解答率) 概ね良好な結果であった。

(その他)

- ・最も正答率の高かった設問は、1(1)の「ある状況を描写する英語を聞き、その内容を最も適切に表している絵を選択する」であった。
- ・最も正答率の低かった設問は、10の「学校生活(行事や部活など)の中から紹介したいものを1つ取り上げ、それを説明するまとまりのある文章を書く」であった。
- ・最も無解答率の高かった設問は、8(2)の「ロボットについて書かれた英文を読み、書き手の意見に対する自分の考えとその理由を書く」であった。

分析

- ・すべての設問において全国・大阪府の正答率を上回っており、
大変良好な結果であった。
- ・無解答率の高いものとしては、自分の考えを書いたり、自分のことについて説明することや、別の表現に書きかえるなどといった英作文の問題であった。
- ・授業で英文を書く機会を増やすことで、英作文に対する苦手意識を少なくしていくことが必要であると考えられる。
- ・『話すこと調査』について、全国平均に比べると良好な結果ではあったものの、正答数0問の割合が半数を超える状態であった。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

国語・数学ともに平均正答率は、ここ数年で最も良好な結果だった。無解答率も前回同様全国平均を下回る良好な結果となっている。単純な計算の問題や言葉の意味を理解する問題に対する正答率は非常に高く、日々の授業の中で反復練習を行い粘り強く課題に取り組んできた成果と考えられる。しかし、複数の情報を読み取り説明する問題や問題解決の過程や結果を振り返って考え、成り立つ事柄を見だし説明する力をどうつけるか、工夫が必要となる。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

前回と比較し、全体的な学力高位層はほぼ横ばいだったが、低位層の増加がみられる。教科ごとでは、国語科で一昨年から昨年にかけて低位層が大幅に減少したが今年度はそれが一昨年とほぼ同じ数値に戻りつつある。数学科でも低位層は若干増加しつつあり、見通しを持った授業づくりや、やる気を引き出す導入、課題の設定など学校として統一した授業づくりが必要となる。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

1 基礎学力の定着

① 養中型「共動学習」

- ・全員が「わかった」「納得した」と言えるまで班やペアで教え合い学習を行う。
- ・節末課題や単元テストを通じた反復練習により基礎学力の定着を図る。

② 単元プランの活用

- ・見通しを持った学習計画を生徒と共有し、安心できる授業づくりを行う。

2 言語活動の充実

① 振り返りの作成

- ・主体的に学習へ取り組む態度の評価として、節や単元ごと、演習や実習ごとに振り返りを記入することで、理解した内容を言語化して表現する取り組みを行っている。
- ・今後は上記の振り返りに非認知能力の育成を目指して、学校教育目標の「やる気・やり抜く・共感性」を意識した振り返りシートを作成していく。

② 問題作成・課題探求活動

- ・学習内容の最後の取り組みとして、単元の中で理解した内容で自ら問題作成を行うことやさらに深く追及する課題を見つけ交流する。その際、タブレットを使用して効率よくプレゼンテーションを行うことができるよう指導する。

3 授業方法・内容の工夫と改善

① 養中型「共動学習」

- ・授業の目標・流れの提示や教師の説明の短縮化、ペア学習やグループ学習の実施、振り返りの実施を固定化して、どの教科においても同じ流れで授業を行えるよう取り組みを進めている。

② 授業で養う「やる気・やり抜く・共感性」

- ・挑戦してみようと思える導入（やる気）、粘り強く取り組もうと思える課題（やり抜く力）、共に動き伝え合い学び合える学級づくりや活動づくり（共感性）を授業の中で常に意識し、生徒への提示を行っていく。

③ オールイングリッシュを目指した授業づくり

- ・NETを積極的に活用したオールイングリッシュ授業を行っていく。また、難しいと感じる子に対してクラスメイト同士で通訳をし合うことで共動学習の一環とする。

4 学校全体としての取組み

放課後学習会の実施

- ・学力低位層を一人も見捨てないために、週に1～2回程度放課後に学習会を実施。
- ・テスト前は学年による質問会や課題作成の補助、整理整頓の指導や補助なども行う。